

主 題：約束のメサイヤが来られた
聖書箇所：ヨハネの福音書 1章9-12節

このクリスマスは私たちに約束の救世主、メサイヤがもう既にこの世に来てくださったことを教えます。きょうこのクリスマスの礼拝で私たちが見ておきたいみことばはヨハネの福音書1章です。ヨハネがイエス・キリストの降誕について次のように教えます。

ヨハネの福音書1：9-12

- :9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。
- :10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。
- :11 この方はご自分のくじにいられたのに、ご自分の民は受け入れなかった。
- :12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

A. イエス・キリストとは 9-10節

まずヨハネはこの約束のメサイヤであるイエス・キリストがどのようなお方なのかということの説明をします。ごらんいただいたようにイエスのことを「光」と記しています。そしてここにこの方の五つの特徴が記されています。まさにこれはすべてイエス様が一体どのようなお方であったのかを私たちに示すのです。まず最初、9節に「まことの光」とあります。そして同じく9節に「すべての人を照らす……光」だとあります。三つ目に「世に来ようとしていた」、四つ目に「この方はもともと世におられ」と10節に出てきます。そして同じく10節に「世はこの方によって造られた」と書かれています。まことの光であり、すべての人を照らす光であり、この世に来ようとしておられた光であり、もともと世におられた光であり、そしてこの世を造られた光、これが約束のメサイヤ、イエス・キリストだとヨハネは伝えます。それぞれどういう意味を持っているのかご一緒に見ていきたいと思います。

1. まことの光 9節

「まことの」という形容詞は「本当」や「本物」、「正真正銘」という意味を持ったことばが使われています。ヨハネはまずイエスは真実なお方であると告げるのです。言うまでもなく光は隠れていたものを明らかにします。例えば暗闇の中でも、光があればすべてのものははっきりと見ることができます。ですから光というのは私たちが知るべき真実を明らかにしてくれるのです。あえてヨハネがここで「まことの」ということばを使ったのは、まことでない光、にせものの光が存在するゆえにイエスは本物の光なのだ、真実なお方であるということ告げるのです。Ⅱコリント11：14の中に、あの「サタンさえ光の御使いに変装するのです。」と教えます。サタンは常に人々をだまそうとします。さまざまな方法をもって人々を惑わし、人々が真理から外れていくようにと誘惑をします。ゆえにこのイエスはそうではないということ、この方は真実なお方であるということをもつてヨハネは告げるのです。

2. すべての人を照らす光 9節

「照らす」光というのを原語で意味を調べてみると、「何かの上に光りを当てる」とか「光を持ってくる」、「教える」ということです。ですからこのことばはイエス様だけがすべての人々に人生の意義、その価値や重要性とその目的を明らかにすることができることを教えています。「すべての人を照らす」光というのは真理を明らかにするお方です。一体真理が何なのか。なぜ私たちは生きているのか。どこから来てどこへ行くかとしているのか。我々が知りたいのは死後どうなるのか。神様はおられるのか、もしおられるとすれば神と名のついた物がこれだけ蔓延した世の中であって、一体どの方が本当の神なのか。どうすれば本当の幸せを手に入れることができるのか。これだけ物が豊かに存在しているこの世の中であって、なぜ私たちの心がこれだけすさんでしまっているのか、満たされたいのか。どうすれば私たちが本当の満足を得ることができるのか。光であるお方はその真理を明らかにして下さるのです。どうしたら私たちが探し求めているものを見出すことができるのか。光であるゆえにそれを私たちに明らかに示して下さる。そんなお方であると。

3. この世に来ようとしていた光 9節

約束のメサイヤであるイエス様というのは約束されていたお方だということ。この世に来ようとしていたのだと。そこに意思があります。そこにご自分のご計画があります。何となく生まれたのではなかった。来ようとしていられたのです。確かに聖書にはメサイヤ、救世主についての約束がたくさん出ています。イスラエルのどの部族に生まれるのか、ユダの部族だと書かれています。どこの町で生まれるのか、ベツレヘムだと書かれています。だれの家系なのか、ダビデの家系だと書かれています。生まれてくるのは男の子であることも。そして、この男の子は処女から生まれることも。みことばは数百の約束をもつて、約束のメサイヤが一体どのような人であるのか、人々が間違わないようにさまざまな預言を与え

ていました。そしてこのイエス・キリストによってそのすべてが成就したのです。ですからヨハネはこの約束のメサイヤ、イエスは約束に基づいてこの世に来てくださった方だと。実際にヨハネ1：14にも「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」とあります。イエスは「ことば」であり、イエスは「光」である。その方が私たちの間に住まわれた。つまり人となられたということです。神が人となって来てくださったと彼は教えるのです。

4. もとから世におられた光 10節

すべてのものが創造される前から、この世のすべてのものが造られる前から、この世におられた。つまり永遠から永遠に存在されているお方であり、被造物ではないということです。被造物であれば始まりがあり終わりがあります。でもこの方は被造物ではない。永遠から永遠に存在されておられるお方であると。

5. この世を造られた光 10節

この世を造られたお方と書かれていました。この方によってすべてのものが造られた。つまりこのお方は創造主なるお方であると。パウロは「万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。」(コロサイ1：16)、御子つまりイエス・キリストの話です。

ヨハネがここで私たちに明らかにしようとしたのは、約束の救世主、約束のメサイヤであるイエスはこの世に来られた、光であるこの方がこの世にお見えになったということです。この方は真実なお方であり、私たちに真理を明らかにしてくださるお方であり、約束されていたお方であり、永遠のお方であり、創造主なるお方だと。ヨハネはこのイエス・キリストこそ救世主であるとともに、まことの神だということを教えようとするのです。

◎ イエス・キリストとは：ヘブル書による

クリスマス——すべてをお造りになった創造主なる神が人としてこの世に来てくださった、それを記念するのです。人となってこの世に来てくださったイエス様については、ヘブルの著者も私たちにわかりやすく教えてくれています。イエス様が一体どういうお方なのか、それを知るためにもその箇所を開いてみてください。

ヘブル1：3に「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」とあります。この箇所にすごいことが記されています。この箇所は私たちにイエス様が一体どのようなお方なのか五つのことを教えています。

① 御子は神の栄光の輝き

「御子」、つまりイエス様の話です。この「栄光の輝き」の「輝き」ということばは、ギリシャ語では特に放射するということです。月は光を放射するのではなく反射しています。つまりここでこの著者は、イエス様というのは「神の栄光」を反射ではなく放射するお方、つまり「栄光」にあふれた神だと教えるのです。

② 神の本質の完全な現れ

この方は本質的に神ご自身である。なぜこんな書き方をしたかということ、イエス様がこの地上におられた時、私たちと同じように肉体を持っておられた。そのことからして神とは違うのです。神は霊だと書かれてあるように私たちのように肉体を持っているではありません。しかし、確かに肉体を持っておられたけれども、本質的に神だと言うのです。

③ 力あるみことばによって万物を保って

つまり主権者なるお方だと。この方はすべてのものを造っただけではない、この方はご自分の計画に沿ってすべてのものを支え、すべてのものを導いておられるのだと。

④ 罪のきよめを成し遂げた

つまり救い主だということです。私たちの罪を完全に永遠に清めることができになるお方であると。

⑤ すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれた

そしてすごいことがここに書かれています。まず一つ言えることは、この3節のところに「罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました」の「右の座」というのは一番高い最高の地位であったり名誉、また権威を意味します。イエス様はすべての働きを成し遂げた後、そこにお着きになったと。それは、イエス様がその地位に全くふさわしいお方であるということです。最高の地位であり、また最高の名誉であり、最高の権威をお持ちのお方であり、そのような座に着くのにはふさわしいお方であると。なぜならイエス様は神です。同時になぜそこにお座りになったのかと言うと、今見て来

たように、「罪のきよめを成し遂げ」た後、そこに着座されたのです。つまりイエス様がこの世にお見えになったのは目的を持って来られたのです。ただ偶然生まれたのではない。先ほども見てきたように、約束されていた救世主なのです。人類の初め、アダムとエバの時から神が人類に与えた約束は救世主を与えるというものでした。なぜならば悲しいことにアダムとエバは神の前に罪を犯したからです。罪を犯したゆえにその罪からの救いが必要だったのです。そのために最初から神は救い主を与えるという約束を与えました。そしてその約束の救世主が来てくださったのです。ユダの部族に、ダビデの家系に、あのベツレヘムに、処女マリアから生まれた男の子。こうして約束されていたメサイヤは来てくださった。来ただけではない、その方はあなたの罪を負って十字架で死んでくださり、あなたに必要な罪の赦しを備えてくださった。

イエス様がこの地上に来られたすべての目的を成し遂げたのです。だから天に凱旋して天の座に着座されたのです。つまりご自分がだれかということをお教えているだけではない。最も名誉あるお方、至高の存在、すべてのものから称賛を受けるにふさわしいお方。それだけではない、この方はこの世に来られた目的のすべてを成し遂げたのです。救いは完成したのです。中途半端な救いで残っているのではないのです。イエス様のなされた救いの御業に欠陥があるのではないのです。イエス様はすべての御業を成し遂げて完全な救いを設けてくださった。どんな罪人でもこの罪のすべての赦しをいただくことができる、その救いをイエス様が成し遂げたゆえにその御座に着座されたのです。来られた目的を達成したからです。このへブル書を見ても、このイエスは約束の救世主であると、約束のメサイヤなのだということをお教えます。

B. 人間の対応

1. 私たちは神を知らなかった 10b節

先ほどもお話ししたように、神様が我々を救うために来てくださったにもかかわらず、我々はどういうにして彼をお迎えしたのかです。もう一度きょうのテキストに戻って10節のところに「この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。」と書かれています。我々被造物が我々を造ってくださった創造主なる神を知らなかった。注意しなければいけないのは我々が一生懸命真理を知ろうと試みたのに知ることがなかったと言っているのではないということです。みことばが私たちに教えるのは真理を知ることができたのに、悲しいことにそれを知ろうとしなかったということです。なぜそう言えるかということ、神様は私たちにご自分のことを明らかにしておられるからです。私たちの問題は神を知ろうとしないところにあるのです。パウロがローマ1:28で「彼らが神を知ろうとしたがらないので、」と教えます。神様がお造りになったこの自然界は我々に神様のすばらしさを証しています。同じパウロがローマ1:19で「神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。」と言ったように、神がお造りになったこの自然界、この被造物は神の栄光を現しています。神がどんなお方であるかを私たちにある程度示してくれています。我々はその自然界を見る時に、神様がおられること、そしてその方がどんなお方であるか、ある程度知ることができます。

例えば神というのはいのちの源であるということ。なぜなら私たちは何も無いところにいのちを造り出すことはできません。品種改良はできます、でもいのちのないところにいのちを造り出すことはできない。ですから神はいのちの源だということです。私たちもこうして生きています。あの雑草だって生きているのです。いのちがどこから来たかです。そのいのちの源が神なのです。

また、この自然界を見た時に、この神というお方は知恵があることに気づかされます。なぜなら神様がお造りになったすべてのものに存在する法則のごく一部しか我々はわかっていない。なぜ？という問題だらけです。私たちの頭で理解できないからです。神がお造りになったそのすべてのものを見る時に私たちはそこにはかり知れない知恵を見ます。それを通して私たちはこれらすべてをお造りになった創造主なる神様が大変な知恵を持っておられること、そして同時にこの神様は美しいお方であるということもわかります。なぜなら神がお造りになった自然は大変美しいものです。それを見ることによって私たちは癒されます。神は美しい方だ、同時に神は力あるお方、神のなさる御業に対して人間がどんなに挙げたところで太刀打ちができない。今挙げたように、この自然界を見る時に神様はいのちの源でもあるし、知恵があるお方でもあるし、大変美しい方であり、また力ある方であると。ですから神の前に立って、みずからの罪がさばかれる時、だれひとりとして弁解ができないということです。だれひとり神様の前にあなたがおられることを知りませんでしたというエクスキューズは通用しないのです。みんないることを知っているのです。

でも我々の問題はその方を知ろうとしないのです。だから私たちが手を合わす存在を思い出してみてください。創造主ではありません。かつての偉人であったりする。でも私たちと同じように死んだのです。動物を崇拜したとしても動物も同じように死んだのです。いいですか？神によって造られたものが神

を造り出すのは不可能です。被造物である私たちが創造主を造るなんてできないのです。いのちが与えられた私たちがいのちを造り出すことなどできません。神という方はこのすべてのものをお造りになったお方です。私たちにいのちを与えた方です。それでいて私たちはその方を知りたくないのです。私たちが知りたいのは、私たちが信じたいのは、自分にとって都合のよい存在です。ですから私たちが崇拝している対象は自分に都合のよいものばかりです。受験だと言うと受験の神と名のつくものに私たちは手を合わすし、自分のニーズに対してこたえてくれると私たちが信じるものに手を合わすのです。私たちが覚えなければいけないのは、それは神に対する大変大きな罪だということです。なぜなら神がいることを知っていながら、その神がだれなのかを求めようとしません。神がご自身を明らかにしてくださったのに、その神を信じようとしません。かえって神でないものを信じてしまっている。こうして私たちは神に対して罪を犯しているのです。

そのことをヨハネは教えます。「この方はもとから」、永遠の昔からおられ、この世界は「この方によって造られたのに世はこの方を知らなかった。」、私たちはこの方を知ろうとしなかったと言うのです。かつての私たちはそうでした。そしてそういう方が今もこの中におられる。あなたが覚えなければいけないのは、あなたの選択は間違っていて、あなたの選択は神の前に大きな罪だということです。

2. 私たちは神を受け入れなかった 11節

二つ目に私たちがどのような対応をしたのかというと、11節に「この方はご自分のくんに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」とあります。もちろん「ご自分の民」と書かれてあるのはイスラエルの話です。イエス・キリストはイスラエルの町にユダヤ人としてお生まれになった。でも彼らはこの主イエス・キリストを「受け入れ」ることがなかった。この「受け入れ」というのは、「認める」という意味があるのですが、「歓迎」を意味する一般的な動詞です。約束の救世主が来てくださったのに、私たちが罪から救ってくださる救い主が来てくださったのに、人々は彼を歓迎しなかった。それはユダヤ人だけの問題ではありません。我々みんなそうではありませんか？ 私たちはこの創造主なる神、私たちが罪から救ってくださるこの救い主に対して全く無関心です。その話を聞いても私たちは何とも思わない。なぜそんな方のことを学ばなければいけないのだろう、なぜそんな方のことを信じなければいけないのだろうと。あなたも私も無関心でした。私たちには信じる神様がいる、先祖から教えられてきたものを信じてきたし、そのまま信じたらいいのだと。果たしてそれが真理であるのかどうかも我々は考えもしなかった。ただそういうふう生きてきたから、これからもそういうふう生きていったらいいのだと。

このイスラエルの人々がそうであったように、救い主が来てくださったにもかかわらずその方に対して全く関心を払おうとしません。それだけではない、私たちはその救い主を完全に拒絶するのです。あのイエス・キリストが十字架に架かってあなたや私のために完全な救いを備えてくださったにもかかわらず我々は彼を否定し、私には必要ではない、私はそんな救いは間に合っていると彼を拒絶するのです。だっていい人間として生きてきてそのように歩んでいるし、世の中で犯罪を犯したこともない、だから私には救いなど必要ではないと。こうしてあなたのために来てくださった救い主をあなたは拒絶しているのです。そして人間はこの救い主を殺すのです。イエス様を十字架に磔にするのです。確かにイエスを磔にしたのはユダヤ人であり、あの宗教家たちであり、ローマであったと言えるでしょう。でも私たちはイエス・キリストが十字架であなたのために死んでくださったと聞いても何とも感じない。ここまであなたを愛してくださっている神がいるということを知ってもあなたはその方に感謝を捧げようとしません。同じなのです。なぜイエス様が十字架に架かる必要があったのか——それはあなたに罪があるからです。罪あるあなたを赦すためにイエス様は身代わりとなってくださった。あなたに罪がなかったら、イエス様はこの世に来てあなたの身代わりとなって十字架で死ぬ必要はなかったのです。イエス様の十字架があなたのためである以上、イエス様を十字架につけたのはあなたなのです。ちょうどあの宗教家たちがそうであったように、ローマの兵士たちがそうであったように、彼らはイエス・キリストの十字架を見ても感謝もしなかった。これは私のための身代わりだなんて彼らは考えもしなかった。それと同じような人がここにもいるのです。

私たちは約束のメサイヤに対して何をしてきたのか——。我々はこの方に対してその方を歓迎することもない、その方を感謝することもない、受け入れることもない。かえって私たちはその方を知ろうとしないで、この方を拒み続けてきたのです。少なくとも私たちが気づかなければいけないのは、我々はこうして神の前を歩んできたということです。これがあなたの人生であったということです。こうして神に背を向けながら生きてきたのです。

C. 神の赦し 12節

ところが驚くべきことが12節に出てきます。「しかし、」ということばで始まっています。本来ならばここまで徹底的に神を拒み、神を嫌い、神を十字架に磔にするようなあなたや私に対して神は一番ふ

さわしいさばきをその瞬間にもたらしめて、我々は何一つこの方に対して文句を言うことはできなかったのです。なぜならそれにふさわしいことをしてきたからです。でもみことばは言うのです。約束のメサイヤが来てくださり、救いを備えてくださったにもかかわらず我々がその方を拒んだ。「しかし、」神は……と。あなたは神の御怒りを受けるべき存在だということをおわかりですか？パウロがエペソ2：3で「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」と言っています。その理由はもう見てきました。あなたを造った神をあなたが信じないからです。あなたを造った神をあなたが愛さないからです。感謝をしないからです。その方を信じてその方に従おうともしないからです。かえってあなたがしてきたことはその方に背を向けて、自分の思いどおりの生き方をしてきたのです。だからあなたにふさわしい報いがあなたに届くのです。永遠のさばきです。永遠に終わることのない苦しみです。永遠の地獄です。そしてそれこそがサタンにふさわしい場所であり、サタンに従ってきた私たちにふさわしい場所なのです。でもそんな私たちを神はあわれんでくださった。皆さん、信じることができます？これほどまでに神に逆らい続けた私たちのために神はご自身のいのちを犠牲にしてくれたということです。創造主なる神が罪を犯し続ける汚れた被造物、私たちのために想像を絶する苦しみと辱めを受け、そしていのちを捨ててくださったのです。想像してみてください。ご自分のお造りになった人間からあざけられ、嫌悪され、さげすまれ、そして罵倒されたと。親が子どもからこんな仕打ちを受けたら、心は引き裂かれます。でもまさにこれが私たちが神に対してなしてきたことです。それでいて神はそんなあなたや私を赦そうとしてくださった。この「しかし」ということばがそのことを私たちに明らかにします。この「しかし」が私たちに教えるのは、神は人が神に対して行った悪行にふさわしい報いではなく、全くふさわしくない救いを備えて、救いの機会、赦しのチャンスを与えてくださったと教えるのです。神はあなたの罪を完全に赦してくださる。あなたの汚れを完全に清めてくださる。その救いを備えてくださったのです。

D. 神の赦しを得るために 12節

1. この方を受け入れる：真理をそのとおりに受け入れなさい

問題は、ではどうすればそれを我々が得ることができるのか——。そのことが最後の12節の中に記されています。「この方を受け入れた人々」、先ほどもこのことばが出てきました。この世はこの方を受け入れなかった。イエス様が地上にお見えになった時に多くの人々がイエス様のおことばを直接聞きました。なされる奇跡の御業を見ました。日々の歩みを見て、確かにこのお方が約束の救世主であることを知ることができました。確かに預言が成就したのだとそのことを調べればすぐに分かった。しかし彼らはそれを受け入れなかった。ですからヨハネはそうであってははいけない、イエス様が一体だれなのか、ちゃんとその真理をしっかりと受け入れること、そのことをまず言います。イエス様がだれなのかはもう見てきました。この方は創造主なるまことの神です。この方はすべての主権者であられる方です。すべてのものを支配し、すべてのものがこの方に従うのです。後にはこのイエス・キリストの前にすべての者が跪くとあります。神であり主であるからです。この方の前にすべてが跪く、そのような存在だと。同時にイエス様は約束の救世主です。ですからヨハネはこの真理を受け入れなさいと言っているのです。イエス様が一体だれなのか、それを正しく受け入れなさい。この方はすべてを造った創造主なる神であり、この方はすべての上に立ち、すべての被造物がこの方に仕える主権者なるお方であり、そして我々を救おうとこの世に来てくださった救い主なのだ、その真理をそのとおりに受け入れなさいと。

2. その名を信じる：私の主として信じて従う決心をする

その後で「すなわち、その名を信じた人々には」と続きます。別の話をしているのではないのです。強調点が違うのです。私たちに必要なのは神が私たちに示してくださる真理を受け入れることです。今お話ししてきたように、イエス様が一体だれなのか、そのことについての真理を受け入れるのです。ですからイエス様は神だということは信じましょう。でもイエス様が主であるとは信じません。おかしくありません？みことばはこの方を受け入れたと言っているのです。その方がだれなのかをそのとおりに受け入れるのです。もし例えば私はこの部分だけ受け入れません、そういう選択をしたら、神はそれをお喜びになります？救いにあずかるためには、私たちはイエス様が一体だれなのか、その真理をそのとおりに受け入れることです。

そして「その名を信じた」の「名」というのはその人のすべてを指すことばです。今我々はイエス様がだれなのかを見てきました。まさにその「名」です。イエス様が一体だれなのかです。「信じ」ということばがあります。このことばにはあなたの個人的決心が強調されています。私たちが見てきたように、イエス様に関する真理をただ頭で認めるということではないということです。確かに聖書が言っているようにイエス様は神であり、主であり、救い主だと。私はそれを信じます。そしてこの方を私の神として、私の主として、私の救い主として信じて、この方に従っていくか、その決心が問われたのです。イエス様がだれなのかを信じることはできるでしょう。でも問題はあなたとあなたの個人的な関係の話です。あなたがイエス様を信じようと信じまいと、イエス様が神であることは間違いない。イエス

様が主であることも間違いない。イエス様が救い主であることも間違いない。問題はその方をあなたの神として、あなたの主として、あなたの救い主として受け入れるかどうかです。このイエス様を私は私の神と信じて従っていこうとするのかどうかです。その決心があるのかどうかです。このみことばが私たちに教えるのはそのことです。ただ真理を真理として認めるだけではない。それを心から受け入れるかどうかの話です。この方を信じてこの方に従っていく、その決心ができていくかどうかの話です。

結婚の誓いをする時に、この人だけを愛するという決心をします。誓いを立てます。まさにこの信仰というのは神に対して誓いを立てるのです。神様、私はあなただけを愛します。あなたが神だから、私を造ってくださった方だから、そして私をこんなにも愛して、こんな私に一番必要な救いを備えてくださった救い主だから私はあなたを愛して、あなたを信じて、あなたに従っていきます。その決心の話をするのです。

3. 神の子どもとされる特権を与えられる

もしあなたがそれをなしたのなら、神はこんな約束をあなたに下さった。「神の子どもとされる特権をお与えになった。」と。神の子どもとされるというのです。「特権」というのは「権威」や「力」ということばです。神にはその力があるのです。あなたを生まれ変わらせる力があるのです。神に背を向けてサタンの奴隷として生きていたあなたを完全に生まれ変わらせることができる。どんなふうにかというと、あなたを「神の子ども」としてくれるのです。「神の子ども」ゆえに、永遠をこの神とともに過ごすのです。今からとこしえまでも。その祝福を信じる者に与えてくれると。

きょうこのテキストは私たちに何を教えてくれているのかというと、約束のメサイヤ、救世主はもう既に来てくださったということです。そしてこのお方はあなたに最も必要な罪の赦しを与えるために、ご自分のいのちを捨てて、あなたの身代わりとなって十字架で死んでくださった。でも神であるゆえに約束どおりよみがえり、そして今も生きておられる。先ほど私たちが見たように、なすべきことをすべて成し遂げて天の御座に着座されたと。あなたのために完全な救いは備えられました。神ご自身のいのちというはかり知れない犠牲のもとに神はあなたのために救いを備えてくださった。まだイエス様をお信じになっておられない方がおられるならば、あなたに心からお勧めします。今あなたの罪を悔い改めることです。神に逆らい続けてきたあなたの罪を悔い改めて、あなたのために救いを備えてくださったイエス様をあなたの神として、あなたの救い主として、あなたのすべての主として受け入れることです。その決心をすることです。その時に神様はあなたにこの祝福を下さる。このためにイエス様は来てくれたのです。だから私たちは祝うのです。この25日という特別な日だけではない。毎日がクリスマスです。私たちは毎日この方の誕生を感謝するのです。この方が来てくださらなければ、私たちは私たちに一番ふさわしい永遠の地獄に向かっていました。でも今は違うのです。永遠のいのちをいただき、神とともに永遠を過ごせる。こんなすばらしい神があなたの神であることを願います。きょうがあなたにとって救いの日となることを願います。あなたがそれを求めるなら主は与えてくださる。

救われている皆さんもいま一度あなたの感謝を新たにして、そしてもう一度主に従うという決意をもってきょうから歩んでいただきたい。そのように心からお勧めします。